

ヘスタロッチ遺跡巡禮記

野上俊夫

一九一五年八月廿一日、今日からチューリッヒの宿を根據としてヘスタロッチの遺跡めぐりをするのである。朝八時過ぎの汽車で三十分ほど走つてウエツチンゲンに着。驛のすぐそばの師範學校を訪うた。突然の訪問であるのに校長ヘルツォグ氏快く應接され、自ら學校内を案内してくれる。ドイツやフランスでは、學校參觀に文部省とか縣廳とかの許可を要し、許可された學校だけしか見ることが出来ないが、スイスでは日本と同じく、學校は多くは突然の參觀でも喜んで見せてくれる。尤も例外もあつて、バーベルの一小學校では横柄な校長が市役所から許可證を貰つて來いと云つたので、それきり參觀をやめたこともあるが、概していふとスイス人は外國人に對して丁寧なやうだ。四年の物理二年の獨語一年の植物などを見て、正午職員生徒と共に食堂で晝食を馳走され、直ちに分れを告げて一時半の汽車で出發した。それから十年ほどたつた一昨年ごろ、突然京都ホテルから宅に電話をかけて面會し

度いと云ふ外國人があるので、翌日大學で會つて見ると三十歳前後の青年で、自分は十年前にスイスのウエツチンゲン師範學校に居た生徒であつたが、此たび日本に來たので十年前參觀された貴君を訪問したのだと云はれた時は甚だうれしかつた。

又三十分ほど走つてビルフェルト着、寒村の小さい驛である。風呂敷をかぶつた百姓の女に、ベスタロッツチ記念館はどこ問へば、野をへだてた數町さきのビルの村の中で比較的に大きい建物を指してくれる。降り出した雨を侵してその方に行く途中百姓のおやぢと道づれになり、*n*の字を省略した妙なスイス式ドイツ語も此頃は少し馴れて、向うのいふ言葉の十分七八は分るので、それで話しつゝベスタロッツチの墓に案内してもらつた。ビルの村は戸數三四十ほどしか無い至つて小さい農村である。その中で稍大きい家が二つあつて、その一つは寺で、他の一つは小學校である。小學校は二階建て、生徒四五十名ぐらゐを入れる至つて小さいものであるが、その建物の一方の外側の壁が全體で一つの記念碑になつて居る。即ち上半の二階に當る所は、この村即ちノイホーフに於けるベスタロッツチを描いた壁畫であつて、其の下の地面に近い所は、此の地方即ちアルガウ州が彼れに對する感恩の辭を刻した碑になつて居る。即ち有名な次ぎの文句である。

ハインリヒ・ベスタロッチこゝに眠る。

一七四六年一月十二日チユーリヒに生れ

一八二七年二月二十七日ブルグに死す。

ノイホフに於いては貧者の救ひ人たり、

リエンハルトとゲルトルートを以て人々への説教者たり、

スタンツに於いては孤兒の父たり、

ブルクドルフとミュンヘンブクセーに於いては

新しき小學校の樹立者たり

イフェルテンにては人類全體の教育者たり、

人たりキリストたり市民たり

總てを他人の爲にして自らの爲には何事をもせず、

彼れの名に恵みあれ、

感謝するアルガウ州

一八四六年

此の碑のすぐ前方に少し離れて、長方形の墓石が地面に横はつて居り、その下にペ

スタロツチの柩がおさまつて居るのである。墓のまはりに低い鐵柵があつて其の兩側に薔薇を植え、更にその外側に一本づゝの栢を植えてある。ペスタロツチが嘗つて己れの死後の墓のことについて「墓のほとりには薔薇の花一つ咲かん」と云つておいたのによるのであらう。フランスの詩人アルフレド・ド・ミュセーが「我が墓側に柳の樹を植えてくれよ」と歌つたので、巴里のペール・ラ・シエーズの彼れの墓のほとりに柳の植えてあるのを思ひ出される。

一八二七年二月十七日、こゝからすぐ近いブルークの町で淋しく死んだペスタロツチの柩はその翌日に數人の教師たちにかつがれて此のビルの村に運ばれたのであつた。雪のちらつく寒い日に、極めて淋しい葬式であつた。晩年事業に失敗し妻子に先だゝれた八十一歳の老翁の最後は實に淋しいものであつたであらう。

暫らく墓の前に立ちつくして後、墓と反對の側にある入口から學校の中にはいつて見る。案内を乞へども答へが無いので戸をあけてはいつて行くと、女の兒ども十五六名に一人の女の先生が裁縫を教へて居た。突然しかも顔の黄いろい男がはいつた爲であらう、かなり驚いたのは滑稽であつた。

更に二町ほど歩いてペスタロツチ記念館に行つて見る。矢はり小さい建物で今

は一種の補習學校のやうなものになつて居る。所長は裏の農園で働いて居たが來意を通ずると急いで上衣を着て出て、私を案内してくれた。こゝは十四歳から十八歳までの男兒に農事の教育をして居るといふ、今は二十八人收容して居り、専ら實際の勞働を獎勵して居るといふ。たゞ至つて寒村なので、收支が償はず經營が苦しいとこぼして居た。ペスタロッチ自身も常に經營難に苦しめられ、失敗を重ねつゝ教育の事業をやつて來たのであるが、今その最後の地ビルに來て見ると、村も學校も人も、依然として百年前のペスタロッチ在世の時と同じやうな心もちがする。こゝを辭して門前に出ると、はだしの子どもが二人小さい車に牛乳を積んだのを押しつゝ行く。ペスタロッチの教へた子どもは此のやうなのであつたらうと思つて、二人をならばせて寫眞をとつた。

九月二十八日。午後三時半、チューリヒを發してシュネーグ行きの急行車にのり、晴れて暑い。三時間ほど走つてブルグドルフ着。驛から五六町はなれた丘の上に見える美しい古城は、即ちペスタロッチが教へた所である。丘の坂みちを急いで上るのはかなり苦しかつた。中世風の城門の傍の壁上にペスタロッチの銅像があり、ブルグドルフの町から捧げた感謝の言葉が彫刻してある。門を入ればあまり廣か

らぬ中庭で中央に老樹が立つて居る。城壁から下を眺めると幾多の小山が連つてその間の平野を一本の川が流れて居る。美しい静かな景色である。若い軍人とその妻か戀人からしい女と同じく景色を眺めて何事か話して居る。

ブルグドルフに居た四五年の間は、ペスタロッチの名聲まだ十分に上らなかつた時、此の静かな町の、この古い美しい城の中で、静かに思ふまゝの教育をなし得た、彼れにとつて最も幸福な時であつたらうと思はれる。

停車場に引きかへして汽車にのり夕方ベルン着。

九月二十九日。朝ベルンを發して一時間あまりでノイシャテル着、少しの時間を利用して大學を見、又汽車にのつて正午すぎイフェルドンにつく。驛から二三町で城である。平地にある四角形の建物で、中央に中庭があり、四隅に圓形の尖つた塔がある。城の中内部は、博物館と圖書館と男子小學校とになつて居り、そのそばに女子小學校が二年ほど前に新築されたのがあつた城の中庭に面した方の壁は、學校の爲めに新に多くの窓を作られて居た。案内してくれた人は、今よりよほど前に日本人が一人來たことがあるが、それ以後久しぶりで日本から來てくれたのはありがたいて大に喜ぶ。併し城の中でペスタロッチに關するものは、たゞ其の時代からあ

る井戸と博物館の内にあるペスタロッチの胸像とだけで他には殆ど何もない。こゝに居た時分の彼れの財産は皆借金で、借金の債主にとられて、イフェルドンの中に分散してしまつたさうである。博物館もたゞの考古學的の品物だけしか無かつたのには聊か失望した。城の西北の側に沿うて居る街路に、城に面してペスタロッチの銅像がある。二人の子どもが彼れの側に立つて居る。臺石の正面には一八九〇年に建てたことが書いてあり、右側には、大體ビル村の記念碑と同じ意味の事がフランス語で書いてあるが、左側には「乞食たちに人らしく生きんことを教へんが爲めに、我れ自身乞食のごとく生活せり」といふ言葉が彫つてある。

停車場のそばに立派な新式の中學校の建物のあるのを望みつゝ、三時すぎこゝを發して、六時前ジュネーヴ着、二週間ぶりに住みなれた下宿に歸つた。